

競技会レポート

1. 新人戦

2年生 城戸悠太

「あ、これはまずい」。新人戦と同じルールで行われる8月の同立戦2部競技において、ここでは書きたくないほど最低な点数をとってしまいました。久住で行われた山岳滑翔大会以降3カ月ほど飛んでいなかったブランクは、上空で何も課目ができないというほど酷く、そして重くのしかかったような気がします。「新人戦で飛ばないほうがいいかもしれない…」とさえ思っていました。

同立戦が終わって、他大学で行われていた機体整備の見学をしていました。当該の機体は新人戦で使用されると噂されていたASK13型機でした。何か所にも及ぶ羽布修理やペイントのタッチアップをして数日間過ごしているうち、「やっぱり、新人戦で飛んでみたい」と思うようになりました。

9月の合宿でも先輩方、同期の窪田からの説得をうけて「新人戦で飛ばないほうが…」という気持ち完全に失せて新人戦に対するスロットルレバーがフルの位置になりました。ところが9月合宿は悪天候の影響を受け中盤で終了。個人的にも1日しか飛ばませんでした。一緒に出る窪田はフライト時に採点表を後席教官に手渡して採点させているほどの力の入れようでした。一方の私はブランク克服に必死。足を引っ張るようなことだけはしたくなかった。そんな私に迷っている暇はありません。次の週末、阪大大野合宿3日間で課目を練習し、OGCの方が飛行されないタイミングでOGCのために来られた岐大の教官ともガンガン飛びました。また、競技中の声の出し方を窪田に怒られながら(?)教わり、即日それにもとずいたフライトのシミュレーションを行いました。自宅でも、今出川の部室でも、電車の中でも頭の中

では木曾川を思い浮かべいろいろな状況を想定しながら新人戦までに489回シミュレートを繰り返しました。

新人戦の一週間前、龍大岐大の合宿に参加して実地としては最後の詰めを行いました。

新人戦が始まり競技を行うと、今までで最も不思議な感覚を感じました。どのラウンドで飛んでも、思い通りにコントロールでき13や21関係なく上空で課目を支障なく出来ました。ただ、離陸と接地が荒くそこで失点したのは悔しかったです。それでも、できたことはできたこと。自信をつなぎ合わせながら次のラウンドへと進んでいくこと、そこで自分と並ぶ他大学の選手たちの上に行くこと、それを忘れずに最終日まで持っていきました。

全国規模の参加とあって久住の大会で会った西部の人たちの他にも関東の人たちともたくさん来ていました。地域差丸出しのアホ話から、操縦に関することや各大学の年間の発数や部が抱える問題など気づけば真剣な話になっていたこともしばしば。あの閉鎖的な空間だからか、1週間の間にすごい勢いでみんな仲良くなっていったと思います。今でも時々連絡をとりあったりできる友人のつながりがあるという意味でも魅力的な大会でした。

最後に、応援や差し入れをしていただいたOBの皆さま、フライトに全力で協力してくださった教官方、クルーとして参加や最後まで激励してくださった先輩方、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

2. 関関同立戦

3年生 村 瀬 徹

毎年夏に福井空港で行われる同立戦が立命館の諸事情により中止となり、自分にとってライセンスを取得してから初となる競技会が10月29日～11月4日まで木曽川滑空場で行われた。今大会は毎日逆転層がかかっており、唯一立命が得点した日も横風が強く勝負は午前中いっぱいというワンポすら無い盛り上がりには欠ける大会となった。

Day 1

選手のチェックフライトから始まった初日は朝から逆転層がべったりとかかり、あまり日射もなかったため得点者はなく競技終了となった。

Day 2

朝から小雨がぱらつく中競技開始するも、昼前に本降りになり撤収。得点者なし。

Day 3

朝は昨日の雨が少し残り、その後は西高東低の気圧配置が強まり北西風が卓越した。強風であまりまとまっていないサーマルを上手く掴み、立命4回の古川さんが滞空点を獲得。同志社は強風への対応がうまくできず、サーマルはあるものの滞空点の目安である10分の壁を超えることはできなかった。私のフライトもセンタリングで何度も失敗し、浮くことができず反省の多いフライトとなった。

成績

個人

1位 古川(立命) 2点

団体

1位 立命館 2点

Day 4

朝から多少の日射があるものの、相変わらず逆転層がべったりだった。しかし時間の経過とともに逆転層もなくなり始め、この時期では珍しく南風が入りピス交となった。

ピス交後のフライトで小学校上空でプラス0～0.5にヒット。ゆるい旋回でもプラス帯から抜けず、いけると思いバンクをつけて速度を抜いて回る。きれいな旋回を心がけ、風と共に流されて粘っていると次第にプラスが弱くなりR/Wエンド近くまで流されたところでブレイク。その後は沈下に叩かれ再びプラスに当たるも上がれず着陸した。9分43秒のフライトだった。

その後は滞空する選手もなく競技終了。あと1分程度で得点できたのに。ウェザーチェックで今大会はあまり条件は良くなく、滞空点を1点でも多く得点することが勝つことの条件だと考えていたのでとても悔しかった。

Day 5

気圧の谷の影響で高層雲が終日かかり、多少の日射の影響で風が南風に変り出したタイミングで飛び立つも逆転層の影響で全く突き上げられることなく着陸。

本日も得点者は現れなかった。

最終日

朝から日射があり、今日はいけそうだ！という期待のもと予定通り10時に競技開始。気温はぐんぐん上昇するも相変わらず上空にある逆転層を突

き抜けるほどの対流はなかなか起きない。

私は12時前に一発目のフライト。小学校東の林の上でボコボコした気流を感じたが上がることはできず着陸した。そのまま続けて飛び立ち、東側空域端の集落の上を通った後、先ほどボコボコしていた林の上を飛ぶとプラスマイナス0に当たり、全周プラスに入ってからはとにかく速度一定・バンク一定・すべりなしを心がけてひたすら粘って10分32秒のフライト。また得点には一歩届かなかった。

そしてそのまま得点者なく、立命が2点で個人・団体優勝。準優勝者も該当なしという、非常に競技会らしくない競技会となってしまった。

しかし、立命は数少ないチャンスを逃さず、わずか2点、12分程度のフライトで優勝を決めたことは事実であるし、学ぶべきことは非常に多く、これが競技会か…と思われた。

まずはしっかりと大会の反省を行い、この雪辱を東海関西競技会、そして来年3月に行われる全国大会で果たしたいと思う。

3. 東海・関西学生グライダー競技会

集合日・練習日 (山南)

第三十一回東海関西競技会に、同志社はAチームは川治・田渕・篠原の3人、Bチームは山南・村瀬の2人で参加しました。

集合日は、1週間続いた関関同立戦の閉会式からそのまま引き続きでした。

疲労は溜まっていましたが、関関同立戦の結果が不甲斐ないものだったので、チーム数の関係で全国大会の出場権は決定していても絶対良い成績は残してやろうという気持ちが全員にありました。そして、1日目の練習フライトが始まりました。練習フライトでは、今大会で単座機に乗っても大丈夫かのチェックを受けます。

この日は、天気が完全な曇りの状態で、静穏だったので良いチェックフライト日和となりました。チェックフライトでは写真撮影の練習→ゴール通過の練習をしていきました。

この日にチェックを受けた選手は全員チェックが受かりました。(一部の選手はこの時に静穏時のみ単座機OKという結果でしたが…)

Day 1 (篠原)

今日からいよいよ始まると思いきや、あいにくの雨。宿舎で開会式を済ませた後、今後に向け宿舎でゆっくりとしました。

Day 2 (田渕)

宿舎で開会式を終わらせ、仕切りなおして今日から競技会という意気込みでしたのに、あいにくの(まあ、前の日から予想はしていたのですが…)強風で即撤収となりました。試しに飛ばした最初の2発の着陸を見てもなかなかの荒れ具合でした。

Day 3 (田渕)

まだまだ北西風が卓越するというので複座による同乗のみで競技開始となりました。そこまで条件が良くなる予報ではなかったものの、これだけ風が吹けば何か起こるだろうと意気込んで臨みました。篠原、山南、村瀬にとっては初めての東海関西ということもあり、カメラ、自記高のチェック、教官、ピストへの報告のやり方等、フライト以外の面でも経験を積む大切な初日でした。その中で府大の谷口選手がワンポイントゴールで得点。後でログを見せてもらったところ離脱高度610m(風ビュンビュンのため離脱は高いです)、そのままウインチ上空でリダボン(離脱した瞬間にプラスがあること)して700mまであがっていきましました。さて、ここからなのですが、旋回点の高度は550mであるので150m以内の失高で4km行かなければなりません。通常ASK21の場合1kmあたり40mぐらいの失高で計算するので通常4km行くのに160m必要です。つまり足りません。もっと言うと北西風が卓越している中では向かい風の中飛ぶことになるので実際はさらに高度が必要になります。しかし彼は沈下の少ないところ読み、ドルフィンフライトを駆使してワンポイント成し遂げました。この技術は全国大会では絶対に必須です。このフライトは何とか盗み、マネしたいと感じました。たしかにこの日の条件はタイミングの良かった選手にワンチャンスといった感じであったとも言えますが、今回は出場チームが7チームで40分の間に1ラウンド終了してしまうのでそれほど待たずに発航が回ってきます。やはりこの日は悔しいものでした。

Day 3 結果

1位	府大	谷口竜也	500点
2位	同志社B	村瀬 徹	9点
3位	名大B	堀 雄一	7点
4位	立命	築本 剛	5点
5位	龍谷	上田 翼	4点
6位	同志社A	田淵雄亮	3点
7位	名大A	伊藤 新	2点

Day 4 (篠原)

前日の強い北西風はなくなり、ついに単座が解禁となりました。

僕はといえば、まだチェックフライトを受けていなかったため、競技前にチェックフライトを行いました。しかし、着陸がまずくチェックは通らずそのまま競技開始。

競技開始直後から、ちらほら滞空はするものの旋回点まではいけない状況が続いていました。川治、田淵がそれぞれフライトをし、滞空点を獲得したあと、まだ旋回点は狙えないだろうということで、少しでも団体点を獲得するため、僕がフライトを行うことにしました。(滞空点はその日のフライトで一番高い点数しか採用されません)僕がフライトを行うとき、名大堀がほぼR/W上空で高度550ぐらいまであげていたため、そこを狙うことにしました。離脱高度は520でそのまま行くとセパレーション違反となってしまうため、風上に行き、旋回を開始しました。しかし、沈下は少ないもののあがりはず、じわじわと高度を下げながら風下に流されていく状況でした。次々と機体があがってくる中だったため、R/W上空で飛んでいた僕はそんなに風上に伸ばすこともできず、ピストからR/Wの南を風上に行っては流され、行っては流されということを高度400ぐらい

で続けていました。他機を見ても、あがりはず粘っている状況だったため、無理はず、じっとそこにおり、このフライトで滞空点7点を獲得しました。この日は得点した選手は全て滞空点のみで競技終了となりました。

Day 4 結果

1位	阪大	谷垣直人	21点
2位	名大A	伊藤 新	20点
2位	龍谷	上田 翼	20点
4位	名大A	金井 洸	18点
5位	名大B	堀雄 一	14点
6位	京大	中西翔平	9点
7位	同志社A	田淵雄亮	7点
7位	同志社A	篠原大典	7点

以下

村瀬 徹	5点
川治賢祐	4点
山南秀希	1点

Day 5 (川治)

雨のため No Flight。

みな、温泉などに出かけました。

Day 6 (田淵)

雨です。ノーコンテスト確定の雨です。明日の条件は良さそうなのでタイミングのいい時間に発航回ってこいと布団の中でゴロゴロしながら神様にはとても失礼な態度でお祈りしていました。そういえばこれが最後の大会になったかもしれないんだなあ…と少し思いふけていたような気がします。ホント全員全国に出られるのはラッキーなことです。なんとかこのチャンス生かしたいです。

Day 7 (山南)

この日は、朝は霧が濃くて、ウィンチどころかピストからハウトレが見えるかどうかぐらいでした。この霧は機体を組んでいる間に無事解消しましたが…。

競技開始前の練習フライトの段階で少し上空はボコボコしており、競技前のウェザーブリーフィング時にも江口教官が「今日は今までで一番出始めているのが早い」とおっしゃったので周回が期待できました。

昼前ぐらいに条件が出始め、村瀬がまず18点の滞空点を取りました。本人は「隣で浮いていた谷口さん(府大)に一気に抜かれて情けなかった…」と落ち込んでいました。村瀬の隣でトンビが浮いていたらしく、+3~+4で一気に上がれたそうです。谷口はそこでワンポイント。

そしてその後条件が爆発し、京大の中西が文化センターに行き、続々とワンポイントを狙う選手が現れました。

すこし経ってからBチームに発航が回ってきて、バトンタッチした僕が飛びました。

離脱直後に+2~+3のサーマルがあり、一気に650mまで上がりましたがそれ以上は上がりません。上には中西がランウェイ上空で800mにいたのでその下に入って探したのですが、無い…。そうこうしている間に中西が宿舎へ…。自分は他機とのセパレーションも近く、なかなか行きたいところに行けずにどんどん高度を失い、滞空点10点のみというフライトになりました…。

ほぼ同じタイミングで飛んだ選手の中で、中西(京大)は周回、谷垣(阪大)はワンポイントゴール、内藤(名大)はワンポイントクリアという成績を残し、結果的にこの日の成績がそのまま大会全体の

成績になったと言えます。

最終日 (川治)

今大会最終日となった日です。朝はいつも通りに下級生の練習フライト、そして10時になり競技が開始します。みんな朝から気合が入っているようで、ソワソワとしている雰囲気を感じました。この日のタスクは文化センター→宿舎、安全高度550mでした。

この日までの得点はわかっており、私個人としても同志社Aチームの団体点を上げることを念頭に入れ飛ぼうと考えて、自分の番が来るまで上空をずっと観察していました。

最初はチームリーダーである田淵が飛行し、しかし帰ってくることを繰り返し、二番手ではありませんが私が飛ぶことになりました。この判断は、田淵と私は比べるまでもなく田淵のほうが技量が上手ですが、私のほうが運はあることが多いように感じたからです。そして、私の番。西の方角から雲が覆いはじめ、ウィンチ離脱後にどの雲に取り付くかで勝負は決まります。しかし、(運がいいこともあり)ウィンチ離脱後に雲の吸い上げを確認、取り付くことにしました。そしてそのまま南へ流されながらも上昇を続け、ランウェイ南東0.5kmの地点、高度650mまで上昇することができました。この時点で雲がランウェイ西側を覆いはじめ、日射が地上に十分に届かなくなってきていました。ランウェイ西の土手付近で飛行している他機も上昇率が悪いようでした。しかし、私はこのまま南へ流されていても仕方ないと思い、また高度も十分にあることより、西へ延ばすことにしました。そして、雲の吸い上げがありそうな所や地上の少ない日射のあたる場所の上空を通るよ

うにして西へ延ばし、文化センターの南 1km まで近付くことができました。しかし高度は低く、550m。これでは文化センターを通る時には安全高度を下回ってしまいます。そこで私はどこかに上昇気流がないかと探し、しかし上昇気流には当たらず、泣く泣くランウェイに近付くことを行わなければなりません。この時点では分厚い雲が覆い、日射が東海大橋西詰あたりに少しある程度でした。ランウェイに近付いている私はそれを見て、これに賭けるしかないと考えました。そして行き、撃沈しました。そして、通常に場周、着陸しました。

情けなくなりましたが、滞空得点はあります。団体点は少しでも稼ぐほうがいいので、次は(頭もよく、技量のある(笑))田淵に譲ります。田淵が飛んだ時は、雲の一団もある程度通り過ぎてしまっていました。しかし田淵は渋い条件の中でも滞空点を取り、降りてきました。

これにより、私たちの東海関西は終わりました。

そして、閉会式があり、得点が発表されます。他のページなどに記載されるだろうと思い、割愛します。団体個人ともに上位 7 位までを表彰されますので、同志社 A チーム 4 位、B チーム 2 位と表彰され、個人としては村瀬が 7 位として表彰されました。

思えば今大会は滞空点を狙う飛び方を私は考えていたので、それが失敗であったように思います。上位であるチームは周回を行っています。実際、私は最終日に減点を気にせずに(安全を考えながらも)強気で進んでいけばワンポイントは取得できていたかもしれません。

しかし、全国大会へは駒を進めることはできませんでした。今後も練習をしっかりと行い、胸を張って全国大会へ出場を行えるようにしたいと思います。教官方もサポートをしっかりとされています。また OB の方々も応援、支援を行ってくださっています。そして最新鋭の機体である ASW28 も待っています。それらに応えられるように、また全力を出し切れるように、全国大会を頑張ります。

大会を終えて (山南)

今大会は、条件が出た日・時間がかなり限られていました。しかし、そのような条件でも実力がある選手は結果を十分に残していたと思います。

個人としましては、同じタイミングで上がった選手が旋回点をクリアしている中で滞空点しか取れなかったことがとても悔しかったです。

まだまだソアリングで上がる技術も無いですが、前に進むということが全く出来ていなかったと思います。全国大会の出場権は獲得しましたが、このままでは絶対に戦えません。しかし、この大会を通して、自分の弱点・苦手なことが明確に見えたので技量向上を目指します！